

2002年度日本水産学会, 講演要旨集 248, p36.

248 関西空港周辺海域でのバイオテレメトリーによる 魚類の行動測定Ⅲ

コード化ピンガーによるスズキの追跡

○平岡修宜(京大農)・荒井修亮(京大院情報)・中村憲司(シャトー海洋調査)・坂本
亘(京大院農)・三田村啓理(京大院情報)・光永 靖(近大農)・米田佳弘(関空)

【目的】関西空港周辺海域に生息する多くの魚類の中でスズキは大型種で、食物網の上位に位置する。本研究は、バイオテレメトリーによるスズキ成魚の行動測定から、空港護岸がスズキの生息場としてどのように利用されているかを明らかにすることを目的とした。

【方法】コード化ピンガーの装着は、メバル・カサゴ(前報)と同じ腹腔内装着で行った。ダミーピンガーによる予備実験を行い、装着方法の妥当性を検証した。供試魚は、空港の護岸域で採捕し、2001年8月30日に9個体、同年11月16日に11個体の計20個体放流した。各個体の行動は、メバル・カサゴと同様、沿岸に8台、沖合に2台設置したVR2で自動測定した。

【結果】予備実験の結果、ピンガー装着約1日後に体重の減少が観察されたが、それ以降は装着・非装着間での体重変化に有意な差はなかった($P=0.20\sim 0.76$, t-test)。放流実験の結果、10個体は放流後1週間以内で受信範囲から出た。ただし1個体は、約1ヶ月後に戻り数日間留まった。2002年1月10日時点、残り10個体は護岸域で生息していた。この内9個体は、護岸沿いで回遊していたが、途中最高で15日間受信が途切れることがあった。これはVR2の受信範囲を超えた沖合に移動した後、再び護岸域に戻ったためと示唆される。残りの1個体は、放流2日後に定着した地点からその後、全く移動しなかった。